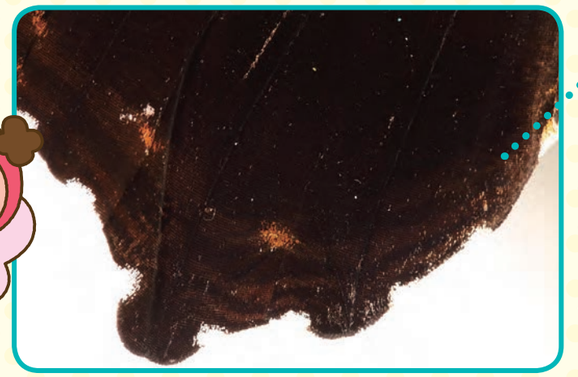
はじめに

チョウのふしぎ

この美しいチョウは、タイヨウモルフォという南アメリカの珍しいチョウだよ。タイヨウモルフォをよく観察してみると、チョウにはふしぎなことが、たくさんあることがわかるんだ！

オレンジと黒の小さな鱗粉が複雑に配置され、美しい翅のもようをつくり出しています。

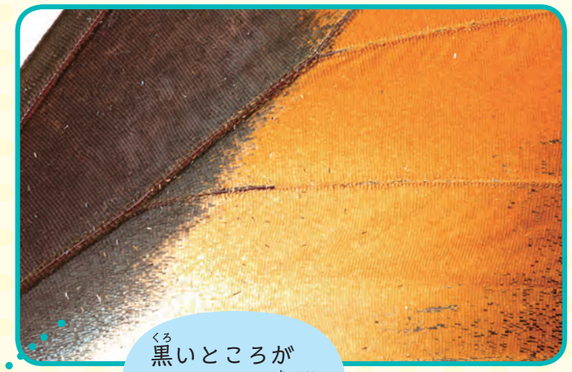
茶色い筋のようなものは翅脈で、傘の骨のように翅全体に広がっています。翅脈が鱗粉におおわれているところもあります。



チョウの翅には、こまかい鱗のような鱗粉が敷きつめられています。２か所に集まるオレンジの鱗粉がもようのように見えます。

チョウの目は、小さな目がたくさん集まっている複眼です。頭からのびている2本の細長い触角は節のようになっています。

黒や白、オレンジの鱗粉のかけらが、ところどころ剥がれ落ちていることがわかります。



翅の付け根付近などには、たくさんの白い毛が生えています。死ぬと、腹の先（おしり）からは油が垂れてきます。

よく見ると翅の形に沿って、まわりに無数のこまかい毛が生えています。

卵が産まれたよ！

ウラグロホシミスジというチョウの卵が産まれたよ！
ウラグロホシミスジの卵が産まれてから、どうやって
チョウにそだっていくのかを追いかけてみよう！

青く光る卵を産みつけたばかりのウラグロホシミスジのメス。

3章

成虫の飼い方

チョウの成虫は、プラスチックの虫かごに入れて飼うよ。虫かごの中にチョウが止まれる草を入れて、スポーツドリンクをしみこませたティッシュを置いておくんだ。また、部屋の中で放し飼いにすることもできるよ。
チョウを手で持つときには、正しい持ち方を心がけようね。

手で持ってスポーツドリンクをしみこませたティッシュに乗せると、すぐに脚で味を感じとり、自分で「吸う口」をのばして吸い始めます。

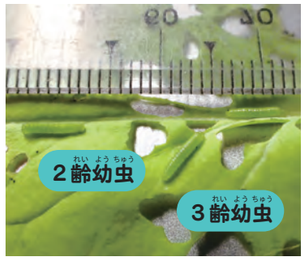
ほかにも果実の汁・乳酸飲料・薄めたハチミツ・砂糖水なども吸います。砂糖水は、ほんの少し甘いくらい（５％の砂糖水）にしましょう。濃すぎると、「吸う口」がベトベトになり、つまってしまうからです。

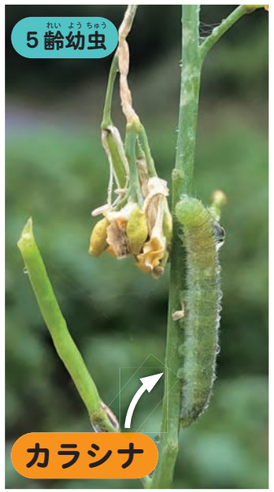
手で持って花の蜜に近づけると、自分で「吸う口」をのばして蜜を吸い始めます。
人間に持たれていることより、蜜の方にひかれているようです。

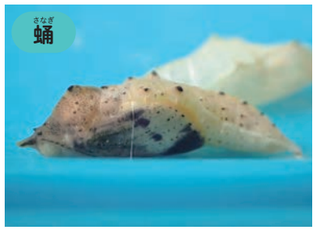
チョウのエサを知ろう

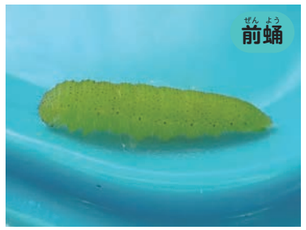
チョウの飼育や採集にとって、もっとも大切なのは、チョウのエサを知ること。いろいろなチョウが育つようすを追いかけながら、チョウの幼虫がどんなエサを食べるのかを見てみよう！

モンシロチョウ









キタキチョウ

モンキチョウ

イチモンジチョウ

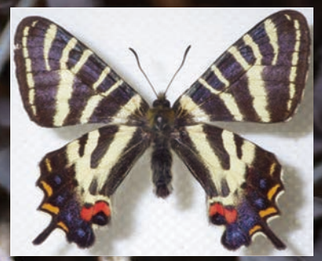
アゲハチョウ科

ギフチョウ
Luehdorfia japonica

東　西

森林限界　石礫地
高山　渓間・岩場
山地　草原
低山地　森
低地　林縁

1



翅全体に紫色の斑紋（鱗粉）が広がる異常型のムラサキギフチョウ。

コシノカンアオイに産卵するメス。（新潟県）

エサ
ヒメカンアオイ
ランヨウアオイなど

ギフチョウの卵

タチツボスミレの蜜を吸うオス。
©齋藤英（神奈川県）

翅の外側が黄色い毛でおおわれた遺伝型のイエローバンド。
©青山潤三（長野県）

ギフチョウという名前は、岐阜県で発見されたことからつけられました。いくつもの段になっているような段だらもようの翅であることから、かつてはダンダラチョウと呼ばれることもありました。春に日光が入って明るく、カンアオイの仲間が自生する人里に近いスギやヒノキの植林地や、雪の多い谷筋などに分布（すみかの広がりをもつこと）しています。日本の国有種で、中国などに分布するギフチョウの仲間の一部が、日本で種分化（ほかの種類にわかれること）したと考えられています。

カタクリの蜜を吸うオス。
©倉地正（山形県）

オオムラサキ
Sasakia charonda

日本の国蝶として知られていて、ベトナム・中国・中国東北部・台湾・朝鮮半島にも分布しています。川や渓谷に沿った斜面の樹林が発生地と考えられ、8月ごろに交尾したメスが、エノキに産卵します。卵が孵化すると、エノキの葉を食べて4齢幼虫まで成長します。12月ごろにエノキを下りて枯れた落ち葉のうらで越冬し、4月ごろには幹をつたって再び木をのぼり、6齢幼虫まで成長して蛹になります。7月ごろに羽化が始まり、出現した成虫はクヌギなどの樹液を吸います。
その名の通り、オスの翅は青紫色に美しく輝きますが、メスは光りません。自然の中でまれに発見される、翅が青く光る異常型（遺伝型）のオスを何度も通常型のメスと人工的に交配し、飼育したものすべての翅が青色に光るオスをつくり出すことに成功した研究者がいます。これはブルーオオムラサキ（モルフォオオムラサキ）と呼ばれ、生命力が弱くて飼育に難しさがありますが、成功すれば、すべてブルーオオムラサキになるのです。

飼育に成功した
ブルーオオムラサキ。
©池田博子

3匹のオスが触角を後ろ側に倒しながら、メスに近づこうとしています。オスが触角を後ろ側に倒すのは、求愛行動です。
©石塚正彦（埼玉県）

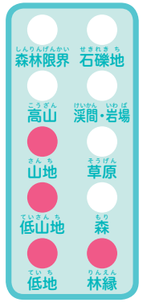
オオムラサキの卵

カマキリに食べられてしまったメス。
©平澤和夫（埼玉県）

オオムラサキの交尾。
上がメス、下がオス。
©平澤和夫（埼玉県）

● タテハチョウ科

北 東 西
四 九



エサ
エノキ
エゾエノキなど

オオムラサキの求愛行動。
左のオスと、右のメスが見合っています。
©石塚正彦（埼玉県）

©大野和美
産卵

©伊藤哲男
卵

©白井まゆ子
孵化（1齢幼虫）

©白井建
2齢幼虫

©川村寛子
3齢幼虫

©池田博子
越冬後の4齢幼虫が初めて出す糞は赤くなります。
4齢幼虫

©岡本隆
5齢幼虫

©池田さやか
6齢幼虫

©石塚正彦
蛹

アドニスモルフォ
Morpho adonis

フ　タテハチョウ科

エウゲニアモルフォに似ていますが、より小さく、翅はさらに青く光ります。フレンチギアナでは１年中見られますが、少なく、オスが飛ぶ時間帯は午前９時〜11時ごろです。

ペレイデスモルフォ
Morpho peleides

ホ　コ

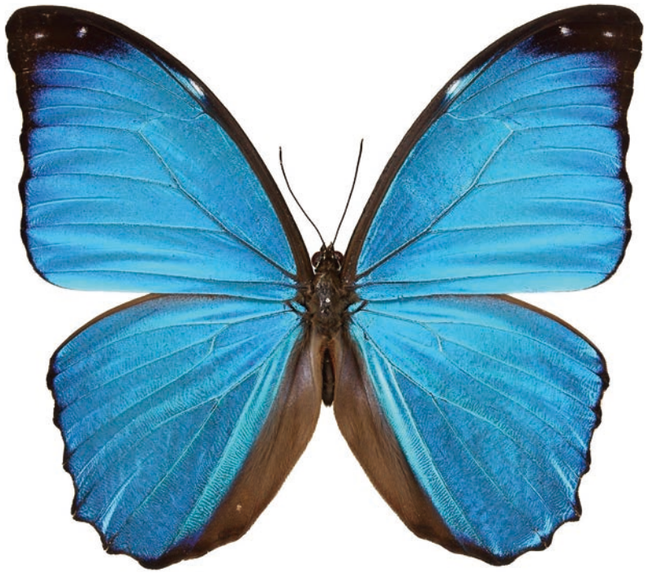
タテハチョウ科

ホンジュラスでは、酒をかけて発酵させたバナナをストッキングに入れ、川沿いの木にぶら下げておくと、その汁を吸いに来ます。©坪池淳

コスタリカのペレイデスモルフォ。
©倉地正

メネラウスモルフォ
Morpho meneraus

フ



タテハチョウ科

青い輝きが緻密で美しい翅のチョウです。翅のうら側には目玉もようがあり、ジャノメチョウ（日本②67ページ）の仲間に近いことがわかります。また、筋や目玉もようの縁取りが赤くはっきりと目立ちます。フレンチギアナでは３月下旬〜５月中旬に多く、11月中旬〜12月は少なくなります。午前９時〜11時ごろに現れます。

ヘレナモルフォ
Morpho helena

ペ

タテハチョウ科

青く輝く翅の中に白い帯が引き立ち、世界一美しいモルフォチョウといわれています。ただし、レテノールモルフォと同じ種類という考えもあります。
なお、モルフォチョウは腹端から出る油が多く、翅に油がしみこむのを防ぐため、標本にするときに腹部をとることが多くなります。

ウスバキチョウ
Parnassius eversmanni

日 アゲハチョウ科

ネコヤナギの蜜を吸いに来たウスバキチョウ。
©大野和美

©朝日純一
5齢幼虫

ウスバキチョウの交尾拒否行動。白い方がメスで、黄色い方はオス。ウスバキチョウは、日本では大雪山など北海道の標高の高い山だけに分布しています（日本①12ページ）が、極東ロシアや沿海州、中央ロシアのクラスノヤルスク地方の山にも分布しています。成虫の多い年には幼虫を見つけるのが難しく、幼虫を見つけやすい年は成虫が少ないといわれています。成虫になるのに2年かかるため、1年おきに成虫が多くなるようです。
©大野和美

オオアカボシウスバシロチョウ
Parnassius nomion

中 アゲハチョウ科

中国・青海省に見られる「コイワヤイ」と呼ばれるオオアカボシウスバシロチョウ。赤い斑紋が大きくなります。

中国・内モンゴルの大草原でアザミの仲間の蜜を吸うオス。

クガイソウの蜜を吸うメス。

ノミオンという学名が有名なウスバシロチョウ（日本①10ページ）の仲間で、特にメスは翅の色やもようが鮮明で美しいとされています。

タイリクヒメウスバシロチョウ
Parnassius stubbendorfii

韓 アゲハチョウ科

クロホシウスバシロチョウ
Parnassius mnemosyne

ウ アゲハチョウ科

黒い星のような翅のもようが名前の由来となっています。ユーラシアの西側に分布しているのに対して、同じく赤い斑紋のないウスバシロチョウ（日本①10ページ）はユーラシアの東側に分布しています。